

## 安曇野市農業農村振興計画推進委員会(第2回)会議概要

1	審議会名	令和3年度 安曇野市農業農村振興計画推進委員会(第2回)
2	日 時	令和3年7月14日 午後1時30分から午後3時30分まで
3	会 場	安曇野市役所本庁舎 4階大会議室
4	出席者(委員)	中島完二委員長、岡村紀子副委員長、福嶋子真委員、東稔丈委員、久保田敏彦委員、松本遊穂委員、丸山昌則委員、小原太郎委員、田中浩二委員、召田洋一委員、平田米子委員、小林みずき委員、岡村公夫委員、小池晃委員、古幡栄一委員(15人/23人中)
5	市側出席者	赤澤農林部長、山崎農政課長、小林農政課長補佐兼農業政策係長、布山生産振興担当係長、齋藤生産振興担当係長、中村農村振興担当係長、小林農村振興担当係長、農業政策係高野副主幹、農業政策係鈴木主査、水谷市農業再生協議会事務局次長、佐藤耕地林務課長、高木農業委員会事務局長
6	その他出席者(計画策定コンサル)	特定非営利活動法人 SCOP 跡部嵩幸研究員
7	公開・非公開の別	公開
8	傍聴人	0人 記者 0人
9	会議概要作成年月日	令和3年7月26日

### 協 議 事 項 等

1	会議の概要
	(1) 開会(岡村副委員長)
	(2) あいさつ(中島委員長)
	(3) 協議事項
	ア 今後の進め方
	イ 施策の方向性に関する意見交換
	(4) その他
	(5) 閉会(岡村副委員長)
2	協議事項
	(1) 今後の進め方
	(2) 施策の方向性に関する意見交換
	ア 「稼ぐ」について
	<b>【主な意見・質問等】</b>
	委員:「目指すべき姿と施策の方向性」の検討にあたり、ターゲットのイメージをつくったと言うことだが、いままでターゲットの明示はなかったということか。
	「稼ぐ」と「守る」は表裏一体だと思うので、「稼ぐ」のは企業経営で「守る」のは家族経営という整理には違和感がある。家族経営でも稼げるようになれば、担い手も出てくる。個人経営の人達にも稼げるように支援をしていくことが必要で、法人だけに稼ぐ支援をしていくというのは違うのではないか。
	経営の選択肢を増やすのは良いことで、私もジュース用トマトや陸わさびを始めているが、つくってから売るのではなく、売れる物をつくる、マーケットインの考え方が重要だと考えている。小さな農家では売れる物を探すということが難しいので、地域振興作物のようにつくったら売れる作物が示されていることは重要。例えば、今年つくるインゲン JA が価格保障してくれるから安心してつくれる。安定した価格で売れることが大切だ。地域振興作物は必ず売れる物を設定し

てもらい、農家が作ることに専念できるような施策にしてほしい。

事務局：ご意見の通り、「稼ぐ」と「守る」は表裏一体と考えている。国の政策が大きく産業政策と地域政策と分かれており、本市の施策も整理上分けているが、家族経営であれ、自給的農家であれ、稼ぐことは大事だと認識している。

ターゲットについては、第2次でもターゲットはあったが、施策体系上では混在していたため、第3次では誰のための施策なのかを意識して、施策体系を細かいところで組み直している。個別の農家を支援する施策と、産地の保全等、面的に農家を支援する施策はアプローチが異なると考えており、その違いで「稼ぐ」と「守る」を書き分けられないかを検討している。

マーケットインの考え方も、詳しい計画の中には積極的に組み込みたいと考えている。

委員：「守る」視点は法人でも大事だと考えている。自分たちのことだけを考えて経営していけばSDGsは守れなくなる。地域全体が良くなることを考えながら農地規模を拡大することには、「稼ぐ」と「守る」の両方が概念として含まれることになる。法人は「守る」のプレーヤーとしても大事なので、ターゲットの表現は工夫してほしい。

委員：「稼ぐ」の施策の柱として、自立経営農家を増やすとあるが、地域の農業者はそんなに弱々しくなく、たくましくやっているように思うので、表現に違和感がある。

田園風景をつくっているのは豊富な水資源である。水環境は農業用水など先代から引き継いできた財産であるので、そのことも「稼ぐ」の目指すべき姿と施策の方向性の表現の中に入れてほしい。それが、湧水からわさび田のような安曇野をイメージする表現につながる。

安曇野ブランドについて、東広島市の視察に行ったが、市が独自に認証基準を決めて、市が認証して商材として流通する仕組みになっていた。販路が多様化して個人で全国に販売するような場合でも、安曇野産としてがっかりさせないように一定の基準を満たした商品としていくことが重要。あらゆる販売に向けた基準づくりが地域ブランド育成の一步となる。

JAの場合は年間の販売が100万円を超えると生産部会として活動できるようになる。地域振興作物の設定品目について、農家の高齢化を考えると軽量野菜が主流になってくると考えられ、その観点からアスパラガスの振興を考えているので、地域振興作物に追加できるようにしてほしい。

委員：目指すべき姿、方向性に出てくる「安曇野の田園風景」のイメージとはどのようなものか。

事務局：田園風景の言葉は、安曇野市の総合計画の中で掲げている「田園産業都市」からきている。田園風景の要素としては、農地、そこでの暮らし、水環境、北アルプスの風景等があり、これら全体を総称したイメージと考えている。

委員：「風さやか」について、私も買って食べてみた。価格は少し高め、味はあっさり、艶はあるがコシヒカリに比べると甘みが少ない。温暖化が進むと、コシヒカリにしがみついているのも難しいので、風さやかをおいしく改良してほしい。

安曇野市のブランド品として長い目で安心してつくれる米に育ててほしい。

委員長：「風さやか」は、温暖化に耐えられること、コシヒカリとは収穫時期がずれるため作業を分散できること、といったメリットがある。安曇野ブランドの米をつく

ったらどうかという意見について、事務局としてはどうか。

事務局：今はまだ具体的に答えることはできない。

委員長：農業委員会としては、ブランド米に育てることができれば価格が高くでき、生産者の所得が上がるので期待している。安曇野独自のブランド米を育ててほしいと考えている。

委員長：「農業の経営基盤」に関する施策の方向性について、国では多様な担い手、半農半Xにも支援するとある。貢献度によって支援に強弱をつけるというのは、小規模農家に不利になるので避けてほしいと思う。

事務局：この部分は、「田園風景と共生する農と暮らし」という目指すべき姿を実現するために、規模の大きい経営体に対してきちんと支援していきたいというのが意図。ターゲット別に施策を検討しており、計画全体としては、小規模農家が不利になることはないと考えている。

委員：「安曇野の田園風景の維持への意欲や貢献度に応じて」の部分は良いと思う。単なる規模拡大でなく、皆が良くなることを考える人に支援するという。意欲を評価するのは難しいが、規模の大小でなく地域を良くしようとする人を支援してほしい。

事務局：強弱を付けるという文言は違和感があるということで、表現を検討します。

委員：戦略作物について、GI表示で安曇野わさびを申請中の一方で、陸わさびを地域振興作物としていくというのは、地域でのわさび振興のバランスが悪くなるリスクがあり、わさび組合としては懸念がある。従来からやっている小さい水わさび農家も納得できる活動にしてほしい。

事務局：検討する。

## (2)「守る」について

委員：水田の維持に関連して、麦後湛水の効果検証はどうなっているか。

大町では、大規模な水生産工場が稼働を始めるなど、地域外で地下水を汲み上げている一方で、麦後湛水程度で足りるのか疑問がある。むしろ生産振興に予算を付けていくべきではないか。

施策の方向性の中の多面的機能支払制度については、農業者だけでなく地域の一般市民も参加できるので、地域全体の取り組みにしていくという点でも盛り上げていくと良い。地域の農業が一般の方から認められ、共感が得られるようになると良いと思う。

事務局：麦後湛水について、雑草防除地力増進が主目的、副次的に地下水涵養。麦後湛水だけでは地下水涵養に効果があったかは、はっきりしていない。

多面的機能支払い制度について、市内に活動組織ができて活動している。中には農家以外の人も参加している組織もある。各組織に周知を図っていく。

委員：麦後湛水については、湧水確保を強調しない方がいい。JAでは、雑草防除として指導している。一般の人から見れば湧水確保に予算が掛けていると疑問に思われる可能性がある。

委員：堰等のインフラが老朽化してきており、多面的機能支払事業のお金だけでは維持しきれない現状である。

委員：農地維持のための地域の中核となる担い手について、「把握が必要」では弱い。行政が担い手を把握するだけでなく、担い手が参加するようにしなければいけな

い。把握した後、ネットワーク化して横のつながりをつくるようにしたい。

市内に、安曇野産農産物を使いたいという観光業者や飲食店がいるが農家とつながれていない。地域の生産者と地域の需要家のマッチングを進めてほしい。大きな所ではなく、レストランと一農家でもいい。

事務局：地域の担い手が集まれる場を持つことは検討していきたい。若い農業者が他産業分野の方と会う機会を設ければ、モチベーションアップや経営の発展に向かうと思われるので、そのような機会を持つことも考えていきたい。

計画の中に具体的な事業を落とし込んでいくので、改めてご意見をいただきたい。

委員：湧水量が減少しているとあるが、具体的数字はあるのか。

事務局：地下水については、水環境課で湧水量、地下水位をモニタリングしている。

委員：湧水量が減り、わさびの栽培面積が減少しているとある。他県では、水量が少なくても栽培できるわさびの品種を開発するとか、温暖化に対応するとかの対応が進んでいるので、遅れないようにしていく必要がある。

事務局：具体的な事業を検討する時に盛り込みたいと思う。

委員：「販売（流通）の現状と課題」に、独自の販路を持ちたい担い手の増加とあるが、実際、個人で安曇野産の農産物を EC 販売したいというケースがあり、販売者も増えていると感じる。ただ、販売はしたいけれども、農産物の管理とかハウスや冷蔵保管とかが難しいので、この点の支援があれば販売事業者は増えるのではないか。また、農産物の販路開拓支援をすべきなのではないか。

安曇野ブランドについて、JA のように大量販売の力でブランド化するのもあるが、少量だけれど糖度が高い野菜等、個人で差別化して販売する物もブランドとなる。あずみーずのキャラクターを個人の販売者が使えるようにするなど、支援していければ良いのではないか。

委員：商品を販売するときには、安曇野の自然を含めて地域の魅力、価値を伝えるようにしている。安曇野市が作成した生産者が載ったパンフレットを商品に入れたりもしているが、個人だとまだ点と点なので弱い。売る側も共通認識を持って協調して安曇野の魅力、作り手の魅力も含めてブランドとして地域に発信してゆく役割を担っていくべき。安曇野という文字でなくイラストやフォントなど視覚的に目にとまるマークなどを設けてもらえれば、そのマークを回数多く目に留めることにより、ブランドとして浸透して行けると思う。また、マークをつくって終わりではなく、そのマークを活用して、エンドユーザーにどう浸透させて行くかを含めて支援していく必要がある。

### （3）「農と生きる」について

委員：障がい者の農業参加の視点が重要だ。安曇野市には約 6,000 人障がい者がいる。国の政策では農福連携があり、障がい者の雇用の受け皿として農業が有効で、担い手になるのではと期待されている。「農と生きる」の中に農福連携を項目として入れてほしい。

事務局：農福連携の取組は大事な視点なので、施策に反映したい。

委員：安曇野らしい田園風景はなんとなくわかるような気がするが、定義が明確でない。例えばマンホールカードの絵のようにイメージを募集して、つくり上げたらどうか。ブランド化の際の定義にしたら良いと思う。

就農した若者が離農するのは、稼げないことに加えて、コミュニティが未成熟であることに原因がある。コミュニティが新しい人を受け入れない、入っていけないという問題も考えて行かなければいけない。

事務局：現段階で、田園風景の定義を突き詰めて考えてはいないが、安曇野市の総合計画との整合は図っていききたい。

マンホールの図柄は、田園風景を良く表現している。この計画の中にイラスト的に使えるか等も検討していききたい。

委員：個人経営農家が離農して田んぼが売られ、工場やアパートに変わり、安曇野の田園風景が変わってきている。豊科では市街化調整区域がなくなっており、10年20年後の安曇野に田園風景が残っているのか心配になる。

事務局：土地利用については、産業を意識するところ、農地を守る場所など、マスタープランでゾーニングして土地利用条例でまとめている。今回の計画では、現有農地を虫喰い開発せずに、荒廃農地にせずに維持していくための施策を考えていくことになる。

委員：消費の現状と課題で「地元農産物の購入や減農薬・無農薬食材を意識する市民は多いが、行動に移している市民は少ない」とあるが、これはアンケートか何かの結果なのか。

事務局：アンケートの結果で、資料1 p16の右側にグラフが示されている。

委員：田園風景については、アンケートで田園風景を維持したいが61%になっており、田園風景のイメージは市民には既に強く定着していると感じる。

その安曇野市の田園風景のイメージには、田んぼが不可欠で、田んぼは必ず人の手が入って維持されている。人の手が必要なことから、残したいと思う市民が、残すことにどれだけ参画できるのかが重要になるが、現状の案だけでは、「農と生きる」の施策の方向性の内容が薄い。市民が仕事以外の時間を農業に参画するようなことを施策に入れて、市民参画による田園風景の維持になるとよい。

農福連携については、JAでも取り組んでおり、苗箱の運搬等手伝ってもらっているが、仕事をしてもらえるだけでなく、若い世代との交流にもなり波及的な効果も生まれている。

また、直売所がマッチングの場として機能していると感じる。

委員：直売所について、以前、QRコードを張り、個人のWEBページにアクセスできるようにしたら、全部商品を下げられた。直売所で、自己PRをすることができないのは残念。

コロナの中で、食育や免疫力に関する施策があってもいいと感じた。

委員：わさび畑の排水に外来種、アレチウリが発生しているが、高齢化した農家では対処が難しくなっている。そこに、ボランティアで保全作業をしてもらい、お礼は作物で返すような、市民が参加出来る仕組みができないか。

委員長：外来種のアレチウリは多面的機能支払の方で対応できるのでは。

事務局：多面的機能支払交付金制度で、一般の方が入れるような運用を考えていきたい。

委員：環境への配慮と参画について、意識は有るものの、どう参加したらいいのか分からないという面がある。例えばエコファーマーの作物や減農薬・無農薬の食材を買ったら売上金の一部が安曇野市の自然を守る活動に寄付されるような、分りやすい方法があれば、市民も参加しやすいと思う。

委員：担い手の現状と課題について、後継者を地元から探すのは限界で外からの人を

引き込むことを積極的に進めないといけない。呼び込む策として、里親制度の充実を策として考えてほしい。

農福連携は、夏秋イチゴ農家での作業について、JAあづみが仲介している。年々利用者が増えて、関係も良好である。

事務局：地域外からの参入者の呼び込みは進めたいと考えている。

委員：まわりの農家に高齢者が多くなり不安に感じているが、資料1p12のグラフではイメージがつかみにくい。人が減ると耕作放棄地が増えてくることが予想される。10年後の予想図、予想グラフがあればいいと思う。その間に急激に放棄地が増えるタイミングがあるのではないか。それに対してどうアクションを取るか、その土地は田んぼか畑か、どこが空いてきて、どうカバーするかなど、具体的な課題やアクションが見えてくる。

委員長：以上で議事を終了します。

#### (4) その他

事務局：今後の日程について

次回は8月25日（水）13：30から、会場は同じ本庁舎大会議室にて行う。

以上